

国木田独歩佐伯での生活(三二)

故 山 内 武 麒

と、信仰について述べてある。

二十一日

つゞいて信仰について論じてある。

二十日
信仰がなければ感情と思想とに統一がない。統一がなければ折角の直覚もすぐ消え去ってしまう。月を見て美を感じないではない。しかし宇宙のうちにこの身この心を信仰をもってつなぐことがなければ、この美感も一時の幻影のみである。心の活泉とはならない。霊の永久の満足とはならない。これまで経験を重ねたことである。

信仰は統一なり、自由なり、力なり。統一なき処に自由なし、統一なき処に力なし。吾理に於て之れを知る。しかしこの統一が自分には蒙瀧としている。

信仰のないものもたしかに霊の妙機もっている。だからよいことを云つて多少満足する。しかし結局は不具である。統一がないから力が弱い。世の中でよく見るところである。

信仰とは宇宙の心なる神の美と善と真とを信ずるなり。則ち宇宙的美、善、真を信するなり。

自分の生命そのものを痛感することが出来ずして到底宇宙の真理への信仰に到達することは出来ない。何故なら信仰とはたゞ生命の疑問から生まれたものである。生命そのものをこの宇宙の中に痛感しなくては生命への疑問は起らないのである。そんな心には信仰の必要はない。軽便な機械でも手製して毎日毎日を送つておればよいのである。

次に

最初の事実に対する、最真の信念

自由と力と希望と偉大の源は是のみ。

最初の事実とは何ぞや。

『此のホールなる、無窮なる宇宙に於ける此の生命』
是れ吾れ人に取りて最初の事実_に非ずや。
と、記してある。

二十二日

午前「今井氏に与ふる文」を作る。

はじめて東京大地震の噂を聞く。

海水浴をする。

地の上の生命の事実は幻である。天地に道となるものはなく人は煩惱の鬼であるに過ぎない。自然は無情な冷たい法則の冷体である。故に自分に真の光がない。自分に真の希望、自信、満足がないわけである。

いや、いや、これは客観的な批評の考え方である。自分は生命そのものの意味に高遠で神聖を感じる。

二十三日

午前今井氏に与ふる書を作る。

午後海水浴をする。

東京の友達に地震の見舞状を出す。

二十四日

徳富氏からはがきがくる。伴武雄君から手紙がくる。

咯血病で帰省したとの由、返事を書く。父から手紙、吉見ハル嬢からも手紙がくる。

東京の大地震の詳細が新聞紙に出る。

昼飯に牛肉を煮て、富永、尾間、並河の三人に馳走する。午後は一緒に海水浴をする。

この日の尾間日記を見ると、

八時教会行十時半教会、帰途国木田師の許に行き昼飯を食す。来る者富永・並河共に快を尽して食す。昼飯を余等に馳走せんとしたるは蓋し牛肉のありたるが為なり。其食する時の快、共に心事を打明けたる連中殊に東都行きの中のみ。終りて珈琲を飲み談話に時を移し、一時半より共に葛港に遊泳に行く、泳ぎ、「ニイナ」を取り、「イチゴ」を食ひ、然して共に舟に乗り、凡そ四時頃迄遊泳をなし夫れより葛港の上なる妙見山に行き、並河君と角力を取り勝敗決せず、又国木田兄と共に角力し、一度は敗れ一度は勝敗決せず。共に帰宅す。時に五時二十分なりし。と、ある。

二十五日

文章を書くことは人間の大きな技である。大きな宝である。何故なら思想も感情もこれを通じてあらわれ、人を教え人を導くにこれ以上のものはないからである。こ

れは極めて陳腐な言葉であるが、自分が昨今心から感じていることである。

二十六日の記には

吾に神なし

嚴肅なる、偉靈なる、善なる、神吾になし。

されど吾宇宙に之れあるを思ひ、未だ吾心の眞の信仰のこゝに至らざる也

吾只だ善と美の神の信仰を求む

と、信仰の浅いことを省みて、深い信仰に入りたいと求めている。

次に、今朝ウォーズウォースのハイランドガールを読んだ。

今井氏に与ふる書を作った。

国民の友二百三十号が来て、読んだ。「一代の風雲と文学の題目」を読んで、感じないではなかったが結局民友子流の言葉にすぎない。民友子のオーソリティはジョンモルレーぐらいのものに過ぎない。

民友子とは徳富蘇峯のことである。

次に、

海水浴をする。

朝鮮の風雲は益々危しい。支那とわが国との戦端が開かれそうな様子である。

あゝ世界人類の大勢はどうか。

二十七日

嗚呼見よ蒼空の蒼々を、白雲の漠々を。

水光山色の翠、此れ夏日の美に非らずや、

元越山上の雲霧の白光を見よ

と、夏空の美を嘆賞している。

そしてウォーズウォースの詩を静かに唱している。

Why should we thus' with an untoward wind' And in the
weakness of humanity'

From natural wisdom turn our hearts away'

To natural comfort shut our eyes and ears

And feeding on disquiet' thus disturb

The calm of nature with our restless thoughts?'

これは哲人が深く悲しんだところのものである。われわれは何を求め、何を追うのか。生命の動機にかられて行くその先は何処か、

この幻妙不思議にわれらはあつて何を追うのか、日々何を追及するのか。

静かに子供の心のようになつてこの自然に對せよ、凡ての先入観を脱してこの自然に對せよ、悠々とこの自然に對せよ、黙々としてこの自然に對せよ。

神は何処にある。美は何処にある。天地の大道はどこにある。きつと清い心をもつ人は神を見るであろう。大昔からの神の言葉は自分をあざむかない。

美在り、大道存す。たゞ心の清くて眼の明かならぬを嘆ず。

否否、之れ愚なり。たゞ心を虚ふして自然を見よ。と、自然に心から親しめと記してある。

二十八日

午前サルトル、レザルタス Natural Supernaturalism の章を読んだ。

昨朝はウォーズワースの Ode 'immortality' の詩を読んだ。

どちらも深く感じる処があつたが筆や口ではあらわすことが出来ない。哲人の観る処、痛感する処、信念する

処は深い。自分も少しわかりかけた。

たゞ自分に信じさせて呉れ。

海水浴をした。

雲漠々々々、美なる哉人間の世界。否神の天地

二十九日

幻影よ去れ、諸々の幻影は実に吾れ人の迷ふ処なり
時の幻影、空間の幻影よ来れ、記憶の幻影よ去れ
嗚呼 に於てか問ふ嘗て在りし吾が友は如何になり

しぞ

と、記して、次に

真理を以て満足するものは誰れぞ、幻影を追う勿れと、幻影にとらわると記してある。